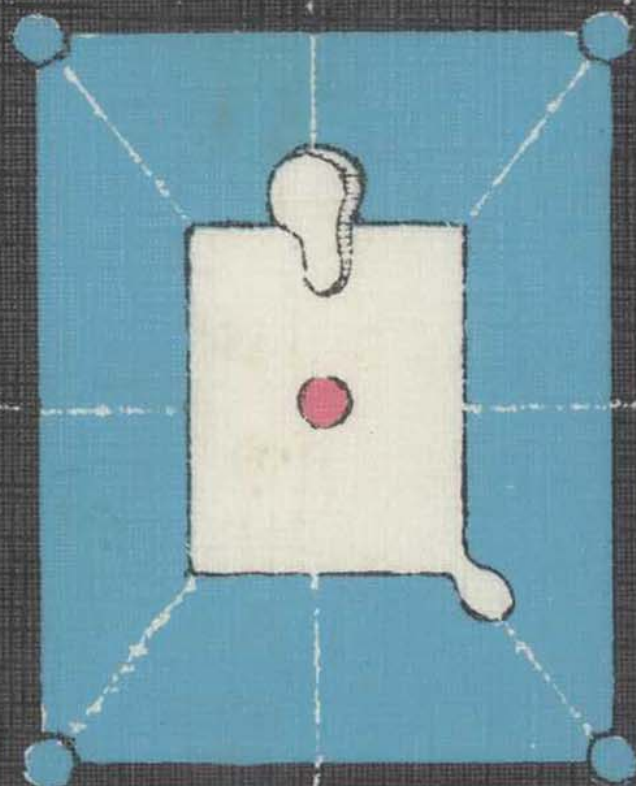


地球になった男

小松左京



新潮文庫

ちきゅう　　おとこ
地球になった男



高校図書館用

新潮文庫 草 97 A

昭和五十五年四月一日発行

著者

小松左京

発行者

佐藤亮一

発行所

株式会社 新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一
編集部(〇三)(二六六)五四二
振替 東京四一八〇八番

装幀 荒木哲夫

印刷・塚田印刷株式会社 製本・加藤製本株式会社

© Sakyô Komatsu 1980 Printed in Japan

乱丁・落丁のものは本社にてお取替えいたします。

新 潮 文 庫

地球になった男

小 松 左 京 著

目次

地には平和を……………	七
コップ一杯の戦争……………	五七
紙か髪か……………	六三
日本売ります……………	九一
瘦せがまんの系譜……………	一二
御先祖様万歳……………	一三九
オ　　ル　　ガ……………	一七九
ぬすまれた味……………	二〇九
兇　暴　な　口……………	二三五

地球になった男	二二七
蜘蛛の糸	二五一
沼	二五七
昔の女	二六三

解説 開 高 健

地球になった男

地には平和を

人影が動いた。彼は反射的に身をひそめて安全装置をはずした。息を殺して見つめる照星の先に、芒の穂がそよいでいる。黄ばんだ草がさがさと動いて汚い手拭で包まれた頭があらわれた。薪を背負った、こすからそうな百姓爺だ。彼は隠れ場所から立ち上ってゆっくり出て行った。用心して、まだ銃をかまえたままだった。

百姓はびくっとして身を引いた。恐怖の色が消えないうちに、軽蔑と憎悪がその淡紙色の顔の上を複雑に走った。しかし彼が正面切って向きあった時は、もう無表情にかえっていた。

「食物をくれよ」と彼は言った。「ひもじいんだ」

百姓は、河原で陽にさらされたざらざらの小石みたいな眼で、彼の姿を上から下へ、下から上へと見た。軽蔑と憎悪が、その腐れた眼蓋の下から再びちらとのぞいた。――服はぼろぼろで、骨の露わな手首や頸筋の皮膚が、鳥の脚みたいに鱗状の垢で蔽われている瘦せっぼっちの餓鬼。

「何で鉄砲向けるだ」百姓は吼えるように言った。「同じ日本人でねえか」

彼は銃先を下に向けた。安全装置はかけなかった。

「家は遠いか？」彼はきいた。

「この下の谷間だ」と百姓は言った。

「何か食わしてくれよ。弁当もほしい」

再びこすっからい憎悪の表情が親爺の顔をかすめた。

こんなちびに鉄砲でおさえられて腹を立てているのだ。

大人に向ってまるで命令するようにえらそうに喋る。当り前のような顔をして食物を持って行く。そして英雄気取りなのだ。兵隊なら我慢するが、こんなガキまで……。

「あんた等の仲間、まだこの辺に残ってるだか？」

彼は首をふり、ちよつとあたりを見まわす。

「俺、斥候に出てたんだ。帰って見たら本隊は殆んどやられて、あとの奴はどこか行っちゃまった」

「つかまっただよ」と百姓は意地悪そうに口を曲げて言う。

「その道をな、みんな手をあげてそろそろ降りて行った。台尻で殴られ殴られ……。負傷してた奴もあっただ」

「逃げた奴だっているだろうさ」

「あんた、これからどうするだ？ いずれつかまっちゃまうによ」

彼は不機嫌さを現わすために、遊底桿をがちやりと言わせてみせた。百姓は口をつぐんで彼の方を牛のように血走った眼で見つめる。

「信州へ行くんだ」と彼は顎をしゃくって言う。「あそこには、まだ大勢頑張ってるからな」

「信州だと？」百姓はいやな笑いを浮べた。「どれだけあるか知ってるかよ？ 街道筋はみんな押えられてるだ」

「山づたいに行くさ」

「行くまでにつかまっちまうにきまつてるだ」そう言って彼の表情をうかがいながらぼそりと言う。「降参しちゃった方が楽できるに」

彼は銃を持ちなおす。ほらこれだ。こう言うとすぐカツとする。追いつめられているから、悪くすると殺されるかも知れない。こいつ等は鉄砲をもった気違いだ。

「非国民め！」と彼は齒の間から押し出すように呟く。「お前みたいな奴がいるから負けるんだ」「おら達に責任はねえだ」そう言って百姓はあわててつけ足す。「お前さん達にだって責任はねえだ。向うが強すぎるだよ。物がうんとある。こっちには飛行機だって一台もねえしよ」

「負けやしない」と彼は固い表情で言う。「降参するくらいなら、戦って死ぬ。あっちの連中だって、その気で頑張ってるんだ」

「そんな事したら日本人は根絶やしになっちまうに」

「お前、奴等の奴隷どれいになってまで生きたいか」彼は声を荒あらげて言う。下級生への説教口調がついてくる。「俺達みたいな若い連中だって、戦って死んで行くのに、お前は何だ？ 大人のくせに……」

「中風の婆さまと娘がいるだ」と親爺はぶつぶつ言う。

「それに百姓が働かねえで誰がお前さん等におまんま食わせるだね？」

彼が答えにつまんで逆上しかけるのを見てとると、親爺はすかさず歩き出しながら言った。

「来なせえ」

谷間の一軒屋だ。やせこけて肋の見える牛が、諦めきった表情で草をかんんでいる。谷ぞいの田は刈り入れがすみ、藁塚が大男のようにあちこちに立っていた。

「奴等はちかくにいるか？」と彼はきいた。親爺は首をふった。

「ひきあげただ。この先の村に少しばかりいるらしい」

その言い方をきいて、彼の中で疑念が少し動いた。この親爺、油断出来ないかも知れない。

「お婆、帰っただ」と親爺は大声でどなる。そばで見ると大きな家だった。中は暗く、すえた臭いが強くした。鶏がいる。卵が食えると思うと唾が湧いた。

殆んど真暗に近い奥の間で、ごそごそ動くものがあつた。親爺はそばへ行つて、何か低い声で話している。老いさらばえた、白い眼が彼の方をのぞく。「心配ねえ」と親爺は言っていた。婆様は早く追い出せと言っているらしい。彼は上り框に腰かけて、汗をぬぐった。腰をおろすと、ふらつとしそうだ。待ちかまえたように睡気がおそつて来る。

「すぐ、まんま食わすで」と、親爺は土間をわたつて来ながら、急に愛想のいい声で言った。「娘がいねえでな。冷やこいまんまだ。ええか？」

「何でもいい」もう喉がぐびぐび鳴っている。口糧が切れてからまる一昼夜、腹がへって気が変になりそうだ。

「あり合せて、虫をおさえてもらうべ。晩げには鶏をつぶすで。今夜は泊つて、明日の朝立ちなせえ」

「そんなにしてもらわなくっていい」彼は掌をかえしたような親爺のそぶりを警戒しながら言っ

た。「飯と弁当だけでいい。鶏なんかつぶしたら勿体ない」

「老いぼれが一羽いるだ。おいとけばどうせ奴等が持ってくだよ」

しかし「奴等」は彼みたいに口では持って行かない。何かおいて行く。親爺は土間を行ったり来たりしながら、大声で喋り続けた。

「しっかり食べてもらわにゃ、信州まで行けねえだよ」

白い飯、野菜の煮つけ、卵、魚の乾物。食いすぎたら立ち所に腹をこわすし、場合によっては死ぬという事がわかっていながら、がつがつめこまずにはいられない。洗茶をのみながら、もし胃袋が許すならば、もっと食いたいと言う衝動をおさえるのに苦労した。飢餓はまるで悪鬼のように彼にとりついていて、それは消化器だけでなく、全身をくまなく手足の先までうずかせる浅ましい虫だ。——外に誰か来た足音がした。彼は銃を引き寄せた。それをちらと見て、「娘だ」と声をかけながら親爺は足早に出て行った。彼はそれでも銃をひきつけて窓際ににじりよった。若い女の話し声がした。親爺の声は急に低く、せきこんだようになり、それから二人は何か言い争うように早口の方言で喋り合った。ふと窓の端をかすめるように、丸く平べったい女の顔がのぞいてすぐ消えた。軽い足音が裏手の方へ走り去った。親爺はのっそり土間にはいりこんだ。不機嫌な顔をしていたが、彼の刺すような視線にあらうと作り笑いをした。

「親にたてつく娘だ」と百姓は言った。「一眠りしなさるか？」

意地でも眼蓋をあいていられたなかった。腹がくちくなり、けだるい疲労に四肢は痺れ出した。「眠るがええだ。風呂をたてるで」

「風呂はいらない」と彼は言った。

「汗を流すとええに。ひでえ垢だ」

「いらないと言ったらいらない」

ここは味方の陣地内ではない。風呂は禁物だ。例え、親爺が本当の親切から言ったにしても。

「今、時間は？」

「三時一寸すぎたよ」

「日が暮れたら起してくれ」

眼がとろけそうになるのを、やっとの事で銃に油をさし、拳銃と銃をしっかり抱いて彼はその場で鉛のように眠りこんだ。

腹痛のために眼がさめた。あんな食べ方をすれば当然の報いだ。日は今沈んだところだったが、部屋の中は空の照りかえしでやっとの物の輪郭が見える位だった。明りはなく、親爺はいないらしい。便所のありかをきこうと思って大声で呼んだが、返事はなかった。奥で寝たきりの老婆がごそごそうごいた。仕方なしに彼は銃を持って外へ出て裏手へ走った。いい按配に便所は裏手に見つかった。ひどい下痢だった。しかし、晩飯に鶏をつぶしてくれるなら、俺は食うぞ、と彼は自分に言ってきた。下痢位平気だ。歩くのが困難だが、死ぬほどの事はない。それにしても親爺の奴、どこへ行ったのか？——便所を出た時、彼は遠くで何か唸るような音をきいたが、気にもしなかった。出て来た時と反対側からまわって行くと、家の裏手に母屋にくっついて、離

屋やのような一棟ひとむねが建たっていて、中に明ありがともっていた。通りしなに、何げなしに窓からのぞくと、赤とピンクの色彩が眼についた。彼は思わず立ちどまってのぞいた。壁に真赤な服と桃色の服がかかっていた。鏡の前にいた娘は、はっとしたようにこちらをふり向いた。平べったい丸い顔、それが白粉おしろいで濃くぬりたくられ、眉まゆを引き、唇くちびるを毒々しくぬっている。娘は彼を見てうろたえたように眼をそらした。彼は固い表情をしていた。娘はにっこり笑おうとし、それから困ったように立ち上った。彼は物も言わず娘の顔をじっと見ていた。部屋の隅すみに美しい箱があり、蓋ふたが開かれて、きちんと綺麗きれいにつめこまれたこまごましたものが見えていた。彼にはそれが何であるかすぐわかった。煙草、レモンパウダー、ビスケット……敵軍のC口糧レイシヨウだ。

「あんた……」と娘はしわがれ声で言いって、ためらった。

「奴等、ここへ来るんだな」と彼は声を押して殺して言いった。娘は決心したように早口で言いった。

「あんた……。お逃げよ。すぐ出て行いった方がいいよ。今夜は来ないと思うけど、ひょっとしたらお父ちちつつあん……」

そう言いうと娘は、急に耳をすました。

「お前、敵兵の妾めかけだな」と彼は喉の奥で言いった。彼は若すぎたので、女の事だけは許す気にならなかつた。彼の母は喉を突ついて死んだ。姉も恐らく空襲で死んだろう。男の捕虜はまだ許せるような気がする。彼だって負傷をすればつかまるかも知れないからだ。しかし奴等の手に落ちて、辱はづかしめを受けないうちに舌を噛かみ切らないような女は……。彼は拳銃をぬき出した。自分が何をしようとしているか分らなかつた。彼が安全装置を無意識にまさぐっているのを見ると、女は青

ざめたが、同時にその鈍重な顔に怒りが浮んだ。「馬鹿たれ！」と女は言った。その怒りの激しさは、彼の方がたじろぐ程だった。彼自身も怒りに身をふるわせていた。しかしその怒りは、彼に理解できない壁にぶつかってためらっていた。彼の中に、女の唯一の表象としてあった母の鮮烈なイメージと、今眼前に、全身で怒りを押しつけて来る雌牛のような女の姿の間に引きさかれ、彼は一瞬戸惑っていた。その時、車の音が聞えた。彼ははっとして表の方をうかがった。車はすぐくふかしながら、ブレーキを軋ませて表にとまった。重い何人もの足音と、聞き慣れぬ話し声がした。娘は一足飛びに部屋の奥へとびこむと、C口糧の箱をかかえて、彼にほうった。

「逃げな！」と娘は言った。「藪伝いに裏山にぬけられる」

走り出した途端に、後で叫び声がした。親爺が離屋の窓の所で大声でわめきながらこちらを指さしていた。片手で娘の襟首をつかんでこぎまわしている。兵隊のサーチライトが彼の姿をとらえる前に、彼は後をふり向きざま、拳銃を一発打った。親父の横で娘がくずれ折れるのが見えた。忽ち自動小銃の掃射がおそって来た。彼は窪地にとびこんで横へ横へと這った。拳銃をサックにもどし、帯皮で肩にかけた銃をす早くつかむ。右手で肩に吊った手榴弾をもぎとり、歯にくわえて安全栓をぬく。

「出て来い！」

掃射の合間に奴等のバタ臭い声がわめく。

「逃げられんぞ。抵抗をやめて出て来い」

そのくらいの英語は彼にもわかる。中学校の教師の発音はずいぶん出鱈目だったが。彼はにじ